

【様式】

平成29年度 学校マネジメントシート

学校名 (川越高等学校)

1 目指す姿

(1) 目指す学校像		○ 我が校は、広い国際的な視野と自主的創造的な精神を身につけた「自立した学習者」(Independent Learner)を育成し、地域から信頼される進学校としての役割を果たします。
(2)	育みたい 児童生徒像	○ 利他の心を持ち、行動する心構えと力をもつ、たくましい生徒
	ありたい 教職員像	○ 「文武両道」の活力ある進学校としての実績をさらに向上させ、地域の期待に応えることのできる教職員集団 ○ 個人の資質向上に努めるとともに、組織としての指導力が着実に向上し続ける教職員集団

2 現状認識

(1) 学校の価値を提供する相手とそこからの要求・期待	<p><生徒> ほぼすべての生徒が、大学進学を志すとともに、部活動等の様々な活動にもチャレンジし、充実した高校生活を過ごしたいという気持ちを持っている。</p> <p><保護者> 生徒の進路として大学、特に国公立大学への進学を希望している。生徒の生活面の指導徹底を望む声も強い。</p> <p><地域> 英語を武器にできるグローバル人材の育成を期待されるとともに、英語教育の先進的な取組の情報発信を求められている。</p>	
(2) 連携する相手と連携するうえでの要望・期待	連携する相手からの要望・期待	連携する相手への要望・期待
	<p><家庭> 大学進学に向けた指導を充実させる一方、将来をたくましく生きる力をつけた生徒の育成を図ること</p> <p><中学校> 川越高校を志望する生徒に対しての情報提供が十分であること</p> <p><地域・大学> グローバルマインドをもって地域社会を支える人材を育成すること</p>	<p><家庭> 家庭での学習習慣や、基本的な生活習慣を家庭でつけること</p> <p><中学校> 川越高校への進学を希望する中学生の要望を学校に伝えること 川越高校の教育方針を踏まえた進路指導を進めること</p> <p><地域・大学> 外部指導者として高校の授業、特別活動等を支援すること</p>

<p>(3) 前年度の学校関係者評価等</p>	<p>① 学習指導、進路指導</p> <p>組織的な学習指導の改善、一人ひとりの生徒に応じた適切な進路指導により国公立大学合格者数が増加するなど、きめ細やかな指導により成果を上げている。今後は、こうした様々な取組を振り返り、現在推進している主体的、対話的で、深い学びの実現に向けたAL型授業の充実とともに、3年間を通した組織的系統的な川越高校型学習指導、進路指導を確立することが必要である。</p> <p>② 教職員の資質向上、授業改善</p> <p>AL型授業に向けた授業改善は、学校全体の動きとなって進んでいるところであるが、さらに効果的なAL型授業のあり方について、研究実践を深化させることが望まれるとともに、ICTを活用に向けた教育環境の整備を早急に図る必要がある。</p> <p>③ 国際文理科、英語教育の充実</p> <p>先進的な英語教育、実践的な英語力育成システムが確立され、川越高校の魅力となっている。しかしながら、英語科をはじめとする教員への負担加重や、海外スタディーツアーの改善検討等、教員の人的配置も含めて早急に対応する必要がある。</p> <p>④ 組織運営</p> <p>教職員は、学校全体が教育活動を充実させるため意欲的に取り組んでいる。しかしながら、なかには効果の薄れている取組もあり、そのことが教職員の負担加重にもつながっている。こうしたなか、組織活動をPDCAサイクルで円滑に回すことが求められており、マネジメントシートに具体的な記述を盛り込むことで、学校の取組方向を明確にするとともに、学校運営の在り方について教職員が協議する場を設ける必要がある。</p>
	<p>(4) 現状と課題</p>

学校 運営等	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員は、生徒の進路希望の実現のための授業や面談、部活動の指導等に日々邁進しているが、多忙な日々の中で、生徒・保護者や地域社会のニーズの把握、分掌間の意思疎通が十分ではない面がある。
-----------	--

3 中長期的な重点目標

教育活動	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの生徒が、自分の将来をイメージし、主体的に学習活動や部活動に取り組み、夢の実現に向け着実に努力している。国公立大学現役合格者が100名を超えている。 ・生徒の状況にあった教科指導のあり方が確立されており、各教科の教育力と各教員の授業力が常に向上し続けており、すべての生徒の学力が向上している。 ・先進的な英語教育や国際理解教育が実践されており、継続的に教育内容や教育方法が研究されている。
学校運営等	<ul style="list-style-type: none"> ・教員同士の対話及び生徒や保護者との対話が活発に行われており、学校関係者評価委員会の提言等を活かして効率の良い学校経営を目指し、常に改善が行われている。

4 本年度の行動計画と評価

(1) 教育活動

教育活動に関する項目は、児童生徒を対象としたものとするのが望ましい。

(例)「教育課程・学習指導」「キャリア教育(進路指導)」「生徒指導」「保健管理」など
また、評価項目・指標等を検討する際の視点は、学校の実態に応じて設定する。

【活動指標について】取組・活動の具体的な活動量や活動実績を指標にします。

【成果指標について】取組・活動による具体的な効果や成果等を指標にします。

【備考欄について】「※」: 定期的に進捗を管理する取組 「◎」: 最重点取組

項目	取組内容・指標	結果	備考
キャリア教育 (進路指導)	<p>3年間を見通したキャリア教育を検討することにより、川越高校のキャリア教育プログラムを作成する。</p> <p>効果的な学習指導のあり方の検討を進める。</p>	<p>総合的な学習推進委員会は、川越高校が進めているAL型の授業方法を使って、職業、学問についての探究活動や表現力の育成に向けた取組を新たに計画・実施した。(GW、表現サポート、ディベート大会)</p> <p>効果的な学習・指導方法に係る研究は、「学びの変革」研究推進事業の拠点校として三重県教育委員会と連携しながら1年を通じて計画的に取り組んだ。12月の生徒アンケートでは、対話的な学びが効果的であると回答した生徒は全体の84%であった。</p>	

改善課題

新学習指導要領を受け、継続的なキャリア教育の在り方を考えていく中で、総合的な学習の時間をの再構築が必要である。

項目	取組内容・指標	結果	備考
学校の教育力の向上	<p>アクティブ・ラーニング型授業の研究を継続し、教員一人ひとりの授業力を向上させる。</p> <p>生徒の状況にあった学習指導のあり方について各教科で検討を進め、本年度の検討のまとめを作成する。</p> <p>ICTを活用した授業について実践・研究を進める。</p>	<p>各教科の「見方・考え方」を踏まえた授業実践について研究を進めた。各教科のA L型授業のリーダーを中心に授業実践を行い、情報共有や教科として目指す授業方法について協議を行った。ICTの活用については、本年度、授業でICTを活用する教員が大幅に増えるとともに、教科の特質に応じて様々な活用方法が実践された。クラウドの使用については、外部で研究発表を行った。ICTの活用に係る本校の先進的な取組は、保護者とも情報共有を行った。</p>	

改善課題

ICTの活用については、本年度タブレットを15台、プロジェクターを5台、Wifiを10台、購入し環境整備を行ったが、使用する教員が増えたため、機器が不足している。また、プロジェクターは、授業者が授業ごとに教室に持ち込んでいるが、持ち運び、準備が授業者の負担となっているため、各教室にプロジェクターの設置が望まれる。

項目	取組内容・指標	結果	備考
英語教育	<p>これまでの実践を踏まえ、成果と課題を整理し、新たな取り組みについて検討する。</p> <p>実用英語技能検定等の校外の英語能力認定検査の受検を進めるとともに、高大接続に係る英語指導のあり方について研究を進める。</p>	<p>ペアワークを中心に授業を展開し、スピーキング活動を多く取り入れることにより、英語の総合力を上げる取組が進められている。国際文理科の学校設定科目では、様々な授業場面における英語表現を設定し、創造的思考スキル、情動スキルの育成を図った。スタディツアーでは、昨年度の課題であったプレゼンテーションへの質問場面の設定やオールイングリッシュでのフィールドワークが徹底された。また、英</p>	

		語科が英語によるプレゼンテーションの「川越版ルーブリック」を開発した。	
改善課題			
<p>コミュニケーション英語と同様に英語表現においてもペアワークによる授業を取り入れ、実用的な英語のスキル育成が総合的な英語力の向上につながるようとりくむ必要がある。国際文理科の学校設定科目で研究・実践されている英語教育をさらに普通科に広げていく取組が必要である。国際文理科のスタディツアーについては、年々充実が図られているが、比較的扱いの軽い日系企業訪問やフィールドワークについて内容を見直し、シンガポール大学でのプレゼンテーションとのバランスの上にたったカリキュラム研究・開発が必要である。</p>			

(2) 学校運営等

学校運営等に関する項目は、教職員や施設等を対象としたものとするのが望ましい。

(例)「組織運営」「研修(資質向上の取組)」「情報提供」「保護者・地域住民等との連携」など
また、評価項目・指標等を検討する際の視点は、学校の実態に応じて設定する。

【活動指標について】取組・活動の具体的な活動量や活動実績を指標にします。

【成果指標について】取組・活動による具体的な効果や成果等を指標にします。

【備考欄について】「※」: 定期的に進捗を管理する取組 「◎」: 最重点取組

項目	取組内容・指標	結果	備考
組織運営	<p>メリハリのある会議の運営を目指すとともに、教員相互の対話を促し、学校改革を推進する。</p> <p>業務の整理と効率化を図ることにより、生徒の夢の実現を最大限支援できる組織を実現するとともに、教職員の過重労働の解消に取り組む。</p> <p>学校から保護者への情報発信について改善充実を図る。</p>	<p>臨時の企画委員会を2回開催し、学校の課題である日課の在り方や新に取り入れたクラウドの使用方法等について協議が行われた。保護者への情報発信については、クラウドの使用が始まった。また、その周知徹底のための研修会を行った。</p>	

改善課題

教職員の過重労働の解消が進んでいない。クラブの休養日設定や会議の持ち方、一斉退校日の設定以外に抜本的な取組が必要である。来年度は、学校行事の精選や分掌ごとの仕事内容(出張等を含めた)の見直しを行いたい。

5 学校関係者評価

<p>明らかになった改善課題と次への取組方向</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ アクティブ・ラーニングの授業において、1～2週間のサイクルで授業の振り返りを必ず入れていくことで、生徒のメタ認知の向上を促すことができる。 ○ 英語では、4技能をバランス良く取り入れながら、学習・指導方法の改善を進めるとともに、活動を多く取り入れた学習方法に対する生徒自身のマインドセットを促していくことが必要である。 ○ アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法について、個々の先生の取組を全体で共有し、協議し、提案していく仕組みづくりが必要である。(教科プロジェクト会議等を時間割に組み込み、週1回会合を開く) そのような仕組みを通じて教科ごとにPDCAで授業改善を進めて欲しい。 ○ 授業アンケートをとる際、その目的を生徒に理解させる場をつくって実施した方がより正確な結果が得られる。また、アンケートの自由記載の分析を踏まえて、授業改善を図っていくことが求められる。
----------------------------	---

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校の改善活動には、教職員重視の観点が大切である。年度途中で教職員満足度調査を実施して改善活動に生かして欲しい。 ○ 学校関係者評価委員からの提言のうち、いくつかは次年度優先的に必ず実行する項目として取り上げ改革を進めて欲しい。
--	---

6 次年度に向けた改善策

教育活動についての改善策	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高大接続改革の動きについて、情報収集と教職員への周知を図りながら、教科横断型の探究活動について、学習・指導方法や内容、評価、ポートフォリオ等について検討を進める。 ○ 引き続き、各教科においてアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善を進めるなかで、新たに教科横断的な学習・指導方法の実践研究を行う。 ○ 昨年度からのICT環境の整備を継続するとともに、ICTを活用した先進的な取組について教職員間での共有及び研究を進める。 ○ 国際文理科のカリキュラム開発を通じて改善が進められた学習・指導方法を普通科の教育に組み入れていく。(プレゼンテーション教育、ルーブリックを取り入れた学習等)
学校運営についての改善策	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教科横断的に教育目標、学習・指導内容及び方法並びに評価について協議する委員会等を設置し、カリキュラムマネジメントを進める。 ○ 教職員満足度調査を年度途中に実施し、学校運営の改善を図る。 ○ 構成メンバーの見直しなど、各種委員会の合理化を図る。 ○ 引き続き学校行事の精選により、教職員の負担軽減に努める。